

## 日本語の動詞テイル形と対応するフランス語の形式

津田 香織

### 1. 問題提起

日本語母語話者がフランス語の学習を始めると、フランス語には日本語の動詞テイル形<sup>1</sup>に直接対応する形式がないことにすぐ気づかされる。

(1) Qu'est-ce que tu fais là ?

君はそこで何をしているの？

cf. Qu'est-ce que tu fais demain ?

君は明日何をするの？

(2) Il pleut maintenant.

今、雨が降っている。

cf. Il pleut souvent au mois de juin.

6月はよく雨が降る。

反対に、フランス語母語話者が日本語を勉強すると、日本語にはテイル形があって、動作の継続を表す時はテイル形を使うのだと習う。

(3) 今、何をしていますか。

そしてこの形式の用法が、動作継続にとどまらず、多様であることを知ることになる。

(4) そのくぎは曲がっています。

(5) その道は曲がっています。

(6) 毎朝ジョギングをしています。

(7) 犯人は犯行の1週間前にこの店を訪れています。

では、テイル形に直接対応する形式を持たないフランス語は、日本語のテイル形のもつ意味・機能を持たないのだろうか。例えば、次のような例の場合、

<sup>1</sup> 本稿では議論の対象となる動詞形式を次のように表記する。

「飲んでいる」 「飲んでいます」	V-テイル	テイル形	「飲む」 「飲みます」	V-ル	ル形
「飲んでいた」 「飲んでいました」	V-テイタ		「飲んだ」 「飲みました」	V-タ	

- (8) a. 家に帰った。小包が届いた。  
b. 家に帰った。小包が届いていた。

「届いた」と「届いていた」の違いは、フランス語でももちろん表現される。

- (9) a. Il rentra. Un colis arriva.  
b. Il rentra. Un colis était arrivé.  
(10) a. Je suis rentré. Un colis est arrivé.  
b. Je suis rentré. Un colis était arrivé.

フランス語は、日本語のテイル形とは違った方法で、テイル形が担う意味や機能を実現しているのである。ではその方法とはどのようなものか。日本語と何を同じくし、何を異にしているのか。

以上の疑問を出発点として、本稿は日本語のテイル形の意味・機能がフランス語ではどのように表現されるのかを明らかにすることを目的として、分析と考察を行う。そのために、まず2章でテイル形の意味・機能を整理し、その性質を洗い出す。そしてそこで得られた性質がフランス語ではどのように表現されるのかを3章で見る。テイルの意味・機能は文レベルとテキストレベルに分けて議論する必要がある。本稿では、前者の文レベルでの働きのみを見たいと思う。

## 2. テイル形の意味・機能

日本語のテイル形は、これまで日本語学の中で多く議論されてきた形式の1つである。この形式は動詞のテ形に、有情物の存在を表す「いる」という動詞によって構成される。金田一 (1950)以降、「て」と「いる」に分けずに「テイル」を1つのまとまりとみて研究対象とされることが多い。

テイル形の基本的な価値は、「継続相」であるとされ、「完成相」を担うル形と対をなす。次の例を見られたい。

- (11) a. 太郎が走っている。  
b. 太郎が走る。

(11a) の「走る」(完成相) は時間的に限界づけて把握する「点」的な把握であり、(11b) の「走っている(継続相)」は時間的に限界づけずに把握する「線」的な把握である(工藤 1995, 34; 寺村 1984, 128)。

テイル形の表す継続相はその形式をとる動詞がどのような性質を持つかによって、何の継続性を表すかに違いが出るという特徴がある。

(12) XがYをなぐっている。

(13) Xが死んでいる。

「なぐる」のような主体が動作する動詞は、テイル形で動作の継続を、「死ぬ」のような主体が変化する動詞は変化結果の継続（結果状態）を表すのが基本的用法である。但し、このような意味の生成は固定的なものではなく、一定の条件のもとで変化する。

(14) a. お母さんが着物を染めている。（動作継続）（工藤 1995, 82）

b. 夕日が街を赤く染めている。（状態）<sup>2</sup>（*Ibid.*）

(15) a. 花子さんが窓を開けている。（動作継続）（*Ibid.*）

b. 花子さんが口を開けている。（結果継続）（*Ibid.*）

(14b) はその主体の意志性がないことによって動作動詞が動的解釈を受けず、静的解釈を受けしており、(15b) は客体が話者自身の一部であるから、主体変化と等価になり（再帰構造）、主体変化動詞と同じように結果継続の解釈が引き出される。このように動詞の意志性、他動性といった側面もテイル形が実現する意味の決定に関与している。

テイル形は基本的価値である継続相から、パーフェクト相（動作パーフェクト）と反復相という2つの用法を派生させている。まずは、パーフェクト相から確認しよう。

(16) 明るる日、私は彼の机に近寄って、その番組の話をした。彼も番組を見ていた。（工藤 1995, 103）

パーフェクト相は「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」（*Ibid.*, 99）と定義される。この捉え方では、動詞で示される事態が完成的に捉えられるため、過去を指示する語と共起できることに特徴がある。

この特徴を共有する形式としてV-タがあり、パーフェクト相現在のV-テイルはV-タと競合する。工藤（1995）、井上（2001）の指摘をもとに、両者の違いを整理しよう。

---

<sup>2</sup> 工藤はこの例の「染めている」を結果継続と解釈するが、この解釈に本稿筆者は懐疑的である。無意志的な主体である夕日は「染める」という事態の内的時間を持たないのであれば、結果継続ではなく、単なる状態と見た方がよいのではないか。

表 1 パーフェクト相現在を表す V-テイルと V-タの比較

	V-タ	V-テイル (パーフェクト相)
経過の知覚・把握が必要か	必要 Ex. 財布が落ちた。 Ex. Y は 7 月に X に会った。	不要 Ex. 財布が落ちている。 Ex. Y は 7 月に X に会っている。
実現想定区間	ある (区間内の事態実現) Ex. もうレポートを出した。	ある/ない (=不問) Ex. もうレポートを出している。
完成相の兼務	兼務する (テキスト冒頭に生起し、出来事の継起性に関与する。統括主題に従属しない。)	兼務しない (テキスト冒頭に生起せず、出来事の継起性に関与しない。統括主題に従属する。)

V-タは実現想定区間、すなわち未然と已然が共存する完成的時間を想定するのに対し、V-テイルは開始・終了限界以降の状態・効力を限界づけずに=継続的に、事態を捉える。V-テイルは基本的事態把握である継続相的性格を、V-タは完成相的性格を維持したまま、パーフェクト相で競合しているのである。

派生的意味のもう 1 つである反復相についても確認しよう。

(17) 「よく行くのかい?」「大概行っていますよ」(工藤 1995, 146)

反復相の特徴は、下位要素としての完成的運動が集合として継続的に捉えられることと、時間的限定性 (definiteness) の抽象化した、非顕在的な事態を表すことである。後者の性質は「太陽は東から昇る (ものだ)」のような時間的限定性のない真理を表す文とも連続的になり、このようにして反復相のテイル形はル形と競合する<sup>3</sup>。(17) の「行く」「行っている」がそれぞれテイル形、ル形に置換可能なことも、このことを示している。工藤によれば、反復性を問題する場合のル形とテイル形は、よりアクチュアル (顕在的) な反復性を表す場合はテイル形、よりポテンシャル (潜在的) な場合はル形という形で、ゆるやかに使い分けられる。

さらに、テイル形は次のような例にも使われる。

(18) この道は曲がっている。(工藤 1995, 38; 金田一 1950 (1976, 11))

(19) 秀吉の顔は猿に似ている。(金田一 1950 (1976, 11))

この「曲がっている」「似ている」のテイル形は、動詞の表す事態の内的時間を問題にせず、単

<sup>3</sup> 以下の 2 つの場合には反復相を表すテイル形とル形とは競合しない (工藤 1995, 156-157)。1) 下位要素としての運動が継続的である場合 (テイル形のみ可能; Ex. 何時行っても絵を描いていた); 2) 発話時から見て未来の時点における反復性を表す場合 (ル形のみ可能; Ex. 明日からはひどいぞ。毎日出掛ける)。

に状態を表している。アスペクト的価値を持たないこの用法は「結果状態（結果継続）」と区別して「単なる状態」と呼ばれる。金田一（1950）は「第四種の動詞」と呼んで、テイル形でしか述語形式に用いられないものを分類したが、工藤（1995）はテイル形を持ちえないいくつかの動詞と併せて「静態動詞」としてカテゴリーをたてている。

ここまで、テイル形という形式が文レベルでもつ価値や特徴を見てきたが、ここからはテキストのレベルで用いられたときにどのように機能するかについても先行研究の記述を整理したいと思う。

工藤（1995）はテイル形のアスペクト的価値がテキストにおいては、次のようなテキスト機能を持つとする。

継続相：同時性

パーフェクト相：後退性、原因・理由の説明性

反復性：背景的同時性、説明性

これらの機能を用例の中で確認しよう。(8)を(20)、(16)を(21)として再掲した以下の例を見ていただきたい。

(20) a. 家に帰った。小包が届いていた。(帰った時に小包があった＝同時性) (=8b)

b. 家に帰った。小包が届いた。(帰った後に小包が届いた＝継起性) (=8a)

(21) 明るる日、私は彼の机に近寄って、その番組の話をした。彼も番組を見ていた。(=16)

(22) 梅雨が明けた。ある日曜日、三人はヴェランダに坐っていた。秋山はこのごろよくこうして道子と勉の前に [出てきた/出てきていた]。(工藤 1995, 150; 「出てきていた」は筆者による加筆)

そして単なる状態は、アスペクト的価値がなく状態を表すのに用いられるので形容詞的（工藤 1995, 125）である。形容詞のテキストにおける機能は、継続相と同じく、同時性であろう。

(23) 家に帰った。部屋が暖かかった<sup>4</sup>。

cf. 家に帰った。小包が届いていた。(=8b)

以上、先行研究の指摘を整理して理解されたテイル形の意味と機能は以下のものである。

意味（文レベル）：継続相、パーフェクト相、反復相

機能（テキストレベル）：同時性、後退性、原因・理由の説明性、背景的同時性、説明性

<sup>4</sup> 形容詞述語及び名詞述語にはル形/テイル形の分化がないことに注意したい。これらは“ル形”で継続性＝同時性を表す。

次章ではこれらの意味・機能がフランス語ではどのような表現でされるか見ていく。

### 3. テイル形に対応するフランス語の形式

テイル形に対応するフランス語形式を考えると、文レベルと談話レベルに分けることが必要になる。1章で述べたように、本稿では文レベルの性質のみを扱う。

#### 3.1. 文レベル

以下、テイルの担う継続性、パーフェクト性、反復性、そして非アスペクト的用法の単なる状態がフランス語でどのように実現するのかを順を追って見ていく。

##### 3.1.1. 継続性

前章でテイル形の継続性が時間的限界を無視した非完成的な捉え方であることを確認した。これと比較可能なものとして、フランス語には *aspect sécant* という事態把握がある。Wilmet (2003) は、*aspect sécant* の事態把握を次のように説明する。

Le repère saisit le procès de l'intérieur, le scinde entre le *terminus a quo*  $\alpha$  et le *terminus ad quem*  $\omega$ , ouvrant aux extrémités l'intervalle  $\alpha$ - $\omega$ . (*Ibid.*, 324)<sup>5</sup>

(事行の内的側面に着目する。開始時点  $\alpha$ 、終了時点  $\omega$  は解放されており(固定されておらず)、 $\alpha$  から  $\omega$  までは漸次的に捉えられる。)

事態を限界づけない(解放された状態で)捉えるという点がテイル形の継続性と一致する。Wilmet によれば、*aspect sécant* を担う形式は、文の述語の場合は現在形、半過去形である。以下の例文(24)-(27)で、テイル形はフランス語の現在形、半過去形と同じ価値を持っているかどうか、比較してみよう。

(24) Qu'est-ce que tu fais là ? (=1)

君はそこで何をしているの？

(25) Quand je suis arrivé au terrain, il courait.

私が運動場に着いたとき、彼は走っていた。

(26) \*Mes invités arrivent. Ils sont au salon maintenant.

→*Mes invités sont arrivés. Ils sont au salon maintenant.*

お客さんは到着しています。彼らは今、客間にいます。

<sup>5</sup> Aspect sécant の対概念 aspect global を Wilmet は次のように定義する。

Le repère saisit le procès de l'extérieur, appréhende en bloc le *terminus a quo*  $\alpha$  et le *terminus ad quem*  $\omega$ , fermant aux extrémités l'intervalle  $\alpha$ - $\omega$ . (*Ibid.*, 324)

(事行の外的側面に着目する。開始時点  $\alpha$ 、終了時点  $\omega$  は閉じられており(固定されており)、 $\alpha$  から  $\omega$  までは1つのまとまりとして捉えられる。)

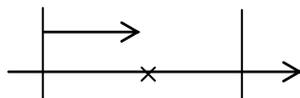
(27) Hier il y avait une grosse araignée à la cuisine. #Elle mourait.

→Hier il y avait une grosse araignée à la cuisine. Elle était morte.

台所に大きいクモがいた。そのクモは死んでいた。

動作継続のテイル形は現在形、半過去形と一致するが、変化結果継続（「到着している」「死んでいた」）の場合には、確かに現在形、半過去形が用いられるものの、動詞の時制を現在形、半過去形に変えるだけではテイル形と同じ意味を表さない。(27) の Elle mourait を解釈すれば「死にかけていた」となるが、この観察からもわかるように、フランス語の aspect sécant は、動詞の事行の開始限界が超えられて、終了限界以前であることを捉えようとしている。それに対して日本語のテイル形は、事態の開始限界あるいは終了限界が超えられたことのみを表している。言い換えれば、フランス語の aspect sécant は事態の内的時間の範囲において事態が開始され、まだ終了に至らない事態を継続的に提示するに対し、日本語のテイル形・継続相は事態の内的時間の範囲を問題とせずに、事態の開始・終了の限界以降の時間を継続的に捉える<sup>6</sup>。テイル形の表す継続性は、aspect sécant のそれより意味が広いということである。工藤が「時間的限界を無視した」捉え方と言っている中には、それ以降の終了限界がない場合も含まれているのである。（例えば「死んでいる」のように死ぬことが終了限界に達している状態は、その後には終了限界を持ちえない。）この違いは次のように図示できる。

aspect sécant の継続的把握



テイル形の継続的把握

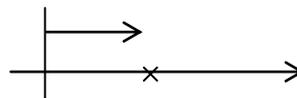


図1 フランス語の aspect sécant とテイル形（継続相）の事態把握

この違いから、テイル形が開始限界以降を捉える場合、つまり動作継続を表す場合は aspect sécant と一致するのに対し、テイル形が事態の終了限界以降を捉える場合、すなわち変化結果継続を表す場合は、事態の内的時間の範囲内での継続性を捉える aspect sécant とは一致しなくなる。

変化結果継続は、動詞の表す事態の内的時間が終了した後であり、その結果が継続的なのであるから、これはパーフェクトの事態把握に近づく。工藤もこのことから、結果継続は、状態パーフェクトであるとする。実際にフランス語との対応関係をみるとときにはパーフェクト相として捉えた方がわかりやすい。この理由から、テイル形の結果継続の用法は次節のパーフェクト相のところで検討したいと思う。

動作継続の問題に話を戻すと、フランス語には être en train de (+inf) という事行の中途を差し出す迂言的表現もある。テイル形との対応を考えた場合に重要なのは、未来時制の継続相を表す場合だろう。Aspect global を持つ単純未来形は継続性を表すことが難しくなり、être en train de (+inf)

<sup>6</sup> cf. 中村 (2009, 378).

の使用が必要になると思われる。

- (28) a. Tu m'appelleras quand tu arrives, pour que je puisse venir t'ouvrir la porte. Je serai dans le jardin en train de préparer le repas.
- b. Tu m'appelleras quand tu arrives, pour que je puisse venir t'ouvrir la porte. Je préparerai le repas dans le jardin<sup>7</sup>.

以上、テイル形の継続相に関して、テイル形が動作継続を表す場合のフランス語の形式について述べた。フランス語には *aspect sécant* という事態把握と *être en train de (+inf)* という表現がある。日本語で結果継続と呼ばれるテイル形の用法は状態パーフェクトと同じである。フランス語と比較するとき結果継続はパーフェクト相として捉えた方がわかりやすいため、次節で扱う。

### 3.1.2. パーフェクト性

ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていることがパーフェクト相の事態把握であった。パーフェクト相は、前節でみた変化結果継続＝状態パーフェクトと動作パーフェクトに分かれる。両者の違いを整理しておこう。

表2 動作パーフェクトと状態パーフェクトの比較 (工藤 2005, 117-125)

	動作パーフェクト	状態パーフェクト
表示される時点	事態成立の時点	結果が現存している時点
テキスト機能	後退性	同時性
運動の後続段階の性質	「効力」：偶発的・間接的	「結果」：直接的
動詞の語彙的制約	ない	ある：主体変化を表す動詞のみ
結果の顕在 (アクチュアル) 性	低い	高い

フランス語にはパーフェクト相の事態把握にあたる *aspect sécant extensif* (以下、ASE と表記) がある (Wilmet 2003, 416-417)。この形式は後に見るように、動作パーフェクトも状態パーフェクトも担いうる。(但し、状態パーフェクトについては *résultatif* (結果相) も関わってくる。こちらも本節でみる。)

まずは、ASE の事態の捉え方を確認しよう。

L'aspect extensif [...] décrit la phase postérieure au *terminus ad quem* ω. (Wilmet 2003, 320)

(完了アスペクトは事態の終了時点以降の段階を表す。)

<sup>7</sup> フランス語母語話者のインフォーマントによれば、自然なのは確かに(28a) *je serai en train de préparer* であるが、(28b) *je préparerai le repas* も完成的解釈に加えて動作継続の解釈が可能だということであった。このことは改めて調べる必要がある。

(再掲) (L'aspect sécant) Le repère saisit le procès de l'intérieur, le scinde entre le *terminus a quo*  $\alpha$  et le *terminus ad quem*  $\omega$ , ouvrant aux extrémités l'intervalle  $\alpha$ - $\omega$ .

(事行の内的側面に着目する。開始時点  $\alpha$ 、終了時点  $\omega$  は解放されており(固定されておらず)、 $\alpha$  から  $\omega$  までは漸次的に捉えられる。)

Aspect extensif が事態の終了後の局面を問題にするのであるから、aspect sécant は、それ以降に終了限界を持たない事態を非完成的に捉えることになる。これは先に見た主体変化動詞にテイル形がついて、変化結果継続を表すのと同じ手続きである。言い切りの場合、複合過去形、大過去形によって表されるアスペクトである<sup>8</sup>。以下に先行研究に挙げられた例をいくつか示す。

(29) Cécile a visité, maintenant, toutes les nations de la terre.

=Cécile connaît, maintenant, toutes les nation de la terre. (Wilmet 2003, 353-354)

(30) Monsieur est sorti, il ne pourra pas vous recevoir.

=Monsieur est dehors, il ne pourra pas vous recevoir. (*Ibid.*)

(31) Grimaud, selon son habitude, obéit en silence ; le pauvre garçon avait à peu près fini par désapprendre de parler. (Imbs 1960, 125)

(29)-(31) は日本語では全てテイル形で表現できる。

前章で日本語ではパーフェクト相の価値は V-タも持ちえて、そのとき V-テイルとの競合があることを確認した。フランス語では複合過去形が担うパーフェクトである。複合過去形は V-タと V-テイルのどちらに近いのか、比べてみよう。

表 3 日本語のパーフェクト相現在を表す形式 (cf. 表 1) とフランス語の複合過去形の比較

	V-タ	複合過去形	V-テイル
経過の知覚・把握が必要か	必要 Ex. 財布が落ちた。 Ex. X は 7 月に Y に会った。	必要/不要* *助動詞として avoir/être が競合する動詞の場合、avoir は経過把握が必要、être は不要。Ex. Liz <u>est divorcé</u> . Liz <u>a divorcé</u> .	不要 Ex. 財布が落ちている。 Ex. X は 7 月に Y に会っている。
実現想定区間	ある(=区間内) Ex. もうレポートを出した。	ある/ない(=不問) Ex. J'ai déjà <u>déposé mon rapport</u> .	ない(=不問) Ex. もうレポートを出している。
完成相の兼務	兼務する	兼務する	兼務しない

完成相と兼務する点では、複合過去形は V-タに近いが、パーフェクト相の価値としては V-タ、V-テイルのどちらの特徴も併せ持っていることがわかる。言い換えれば、日本語の V-タ、V-テイ

<sup>8</sup> 未来におけるパーフェクトについては、筆者にはまだ議論できる用意がない。本稿ではひとまず保留にして、議論を進めていく。

ルで言い分けられること（例：財布が落ちた vs. 財布が落ちている）は、フランス語では形式上区別されないということである。

先の表にも記したが、ASE の形式（複合過去形、大過去形）は助動詞の違いによって avoir PP (=participe passé) と être PP の対立があり、いくつかの動詞においてはどちらも許容される場合がある。そのようにして両者が競合関係に置かれた場合、être PP は経過の把握が不要になる。

(32) a. Liz est divorcé actuellement. (Gaatone 1998, 44)

b. Liz a divorcé il y a deux mois. (*Ibid.*)

このときの être PP の actuellement と共起可能であることからわかるように結果の観察される時点を問題にしている。これは、状態パーフェクト＝結果継続である。Être PP は実際に結果相 résultatif (: un état envisagé comme résultat d'un événement qui s'est produit antérieurement (Creissels 2000, 136)) の価値を持つ場合が確認されている。ここからはこの状態パーフェクトの形式としての être PP を取り上げて、日本語のテイル形と比較をしてみたいと思う<sup>9</sup>。

Être PP が統語的に実現しうる環境は多様である。まず、一部の動詞、先に挙げた divorcer のような動詞と、一部の自動詞の複合形として実現する場合が挙げられる。後者の例を以下に挙げる。

(33) Il est parti depuis trois jours. (Creissels 2000, 137)

また être PP は、複合形であると同時に、受動形でもある。

(34) Les coupables [sont/étaient] arrêtés depuis trois jours.

=On [a/avait] arrêté les coupables il y a trois jours. (Creissels 2000, 134 ; « était », « avait » は筆者による加筆)

<sup>9</sup> 以降の議論は、être PP を複合形、受身形というカテゴリーの垣根を超えて結果相として試みるというものだが、その場合でも、時制のことを整理しておく必要があるだろう。

	複合形	受身形
現在形	Il part	Il est arrêté
複合過去形	Il est parti	Il a été arrêté
半過去形	Il partait	Il était arrêté
大過去形	Il était parti	Il avait été arrêté

このときの être の時制は aspect sécant でなければならない。例えば次のように être が単純過去形 (aspect global) の場合は状態パーフェクトを実現できない。

(i) Ce brouet fut par lui servi sur une assiette ;

La cigogne au long bec n'en put attraper miette ;

Et le drôle eut lapé le tout en un moment. (La Fontaine, *Fables*, I, 18, cité par Wilmet 2003, 377)

なお、未来におけるパーフェクト相については、本稿では議論を保留にしておきたい。

(34) は *depuis* と共起していることと、さらに対応する能動文で ASE の形式が使われていることから、状態パーフェクトであることが確認できる。

このように、カテゴリーを横断して1つの価値(状態パーフェクト)を実現しているところに、*être PP* の形で取り上げられることの利点がある。また次の (35) も *être PP*=状態パーフェクトの形式と考える妥当性を示唆する例である。

(35) *Il est évanoui.* (Creissels 2000, 135)

受身形でも複合過去形でもないこの例における *évanoui* (PP) は形容詞と見なされる。しかし形式上は *être PP* の形をしていて、意味的にも状態パーフェクト(気絶した結果の継続)である。文法的な操作をたどることができないこのような形容詞の派生は、*être PP* という *séquence* が積極的に選択された結果と見なすことができるのである<sup>10</sup>。

しかし、*être PP* は形式が統語的に実現すれば直ちに状態パーフェクトを実現するというものではない。

(36) *Les coupables sont recherchés. = On recherche les coupables.* (Ibid., 133)

(36) は探し終わった結果の状態を表すことはできず、*On est en train de rechercher les coupables* の意味になる。*Être PP* が状態パーフェクトを実現する条件として、先行研究は 1) *PP* に置かれる動詞が *télique* (限界動詞) であること、2) *être PP* に置かれたときに非対格構造 (*S* が *V* の内項 *argument interne*) になること、の2点を指摘している (Creissels 2000, Lagae 2005)。

しかし、以上の条件も必要十分条件ではない。条件に適合しても常に状態パーフェクトが実現するとは限らない。

(37) a. *#Pierre est assassiné/tué/frappé.* (Vikner 1985, 103, cité par Lagae 2005, 135)

b. *#Pierre est allé/né/tombé/venu.* (Lagae 2005, 135)

これらは、状態パーフェクトは表さず、受身形、複合過去形の完成相過去の価値を維持するとされる。また、*être PP* が統語的に実現不可能な場合もある。

---

<sup>10</sup> 次の例も、*Il est évanoui* の成立と連続的に捉えられないだろうか。

(i) *Il est âgé.* (= *Il est vieux*)

但しこの *âgé* は *âge* という名詞から作られている。*\*âger* という動詞は存在しない。しかしこれも、年をとった結果が継続しているという意味では、*être PP* という形式のもつ状態パーフェクト的性質と遠くないように思われる。

- (38) a. \*Le fleuve est débordé<sup>11</sup>. cf. Le fleuve a débordé. (Creissels 2000, 140)  
 b. Le régiment est capitulé. cf. Le régiment a capitulé. (Lagae 2005, 130)

自動詞 déborder, capituler は助動詞として être をとらないという理由で、déborder, capituler の変化結果を述べる文は être PP で言い表すことができない。先の (35) Il est évanoui とは反対に、意味的には être PP が統語的・意味的には実現可能な環境にあるにもかかわらず、文を作ることができないのである。次のような場合も être PP は用いられにくいとされる。

- (39) a. ?La lessive est séchée. cf. La lessive est sèche. (Creissels 2000, 140)  
 b. ?Les jeunes filles sont rougies<sup>12</sup>. cf. Les jeunes filles sont rouges. (Lagae 2005, 134)  
 c. L'eau est rougie. L'eau est rouge. (Ibid.)  
 d. Ces vieux papiers sont jaunis. Ces vieux papiers sont jaunes. (Ibid.)

状態を表す形容詞があるときには、変化を表す動詞から作られる être PP は基本的にブロックされる。但し、(39c), (39d) に見られるように、項の性質などによっても許容度が変わる (Lagae 2005, 135)。

日本語でもこのように形容詞とテイル形の状態パーフェクトの選択が可能な場合があるが、形容詞が動詞の状態パーフェクトをブロックするということはなく、相互補完的関係をなしている。

- (40) a. その紙は黄色い。(様相の描写)  
 b. その紙は [黄色くなっている / 黄ばんでいる]。(変化結果としての様相の描写)

以上のような être PP の非体系性に加えて、être PP はその価値の点で不安定でもある。

- (41) a. Il est parti.  
 b. Il est parti depuis trois jours. (=33)  
 c. Il est parti il y a trois jours. (Creissels 2000, 137)  
 (42) a. La porte est fermée.  
 b. La porte est fermée depuis tout à l'heure.  
 c. La porte est fermée sans bruit. (Gatone 1998, 18)

divorcer のように助動詞として avoir も être も取られる動詞の複合形の場合を除いて、être PP は

<sup>11</sup> « être débordé » という形式に関しては、Creissels が興味深い例を挙げている。

(i) Je suis débordé (de travail). cf. \*On/Ça me déborde. (Creissels 2000, 140)  
 Le fleuve est débordé が非文であるのに対して、主体が人で、忙しいという意味を表す場合には、être PP が実現する。Creissels はこの例を formes résultatives lexicalisées (Ibid., 140) として説明する。

<sup>12</sup> Lagae (2005) はこの文を非文としている。

その価値が副詞や文脈によって決定される。(41c) は *il y a trois temps* という時点を表す表現と共起しているので完成相、(42c) は *sans bruit* と共起しているので、*fermer* という運動は継続的に捉えられる。つまり *être PP* は *séquence* 自体が状態パーフェクトを保証するのではないのである。

以上の観察と日本語のテイル形の作用とを比較してみると次のことが言えるだろう。まず、*être PP* が結果相をもつ場合の条件とテイルが変化結果継続を表す場合のそれとを比較すれば、次のようになる。

表4 フランス語の *Être PP* と日本語のテイル形 (状態パーフェクト) の比較

	フランス語	日本語
動詞が <i>télique</i> である	+	+
非対格構造である (S=内項)	+	-

動詞の *télicité* に関しては、日本語もフランス語も同じである。(主体変化は *télique* である。) 一方、非対格構造に関しては、テイル形の状態パーフェクトではこれは必要条件ではない。日本語では次のような例が可能である。

- (43) 彼はセーターを着ている。
- (44) 彼は子供の頃のことをよく覚えている。
- (45) 彼は車を持っている。
- (46) 彼は事情を理解している。

また、*être PP* の状態パーフェクトは体系性、価値の安定性が脆弱であると指摘したが、テイル形の状態パーフェクトを実現するメカニズムは、体系性は高いと言えるのではないかと思う。形が作れないものはごく少数であり、他形式との棲み分けが明確である。一方価値の安定性に関しては、テイル形も同様に動詞形式以外の要素によって価値が安定することも少なくない。

- (47) a. お母さんが着物を染めている。(=14a)
- b. 夕日が着物を染めている。(=14b)
- (48) a. 彼は駐輪場で自転車を停めている。
- b. 彼は駐輪場に自転車を停めている。

以上のことから、*être PP* とテイル形の状態パーフェクトは確かに近似した価値を共有しているが、*être PP* の方が構造的な制約・不規則な点が多く、また価値の安定性が低いことがわかった。

### 3.1.3. 反復性

基本的には、フランス語の反復性は *aspect sécant* の現在形、半過去形によって示されると言っ

てよいかと思われる<sup>13</sup>。

日本語では反復性を表す際にテイル形とル形が競合することは既に2章で見た。前者が具体的な事態を捉えてよりアクチュアル（顕在的）な事態を、後者はより抽象化が進みポテンシャル（潜在的）な事態を表しやすいということだった。フランス語も、このような違いを表現する手段があるだろうか。

フランス語の場合、*aspect sécant* 以外の時制で反復（繰り返し）を表す場合に、その違いが出てくるように思われる。

まず、過去の習慣に関して、半過去形以外に、複合過去形や単純過去形でも習慣を表されることがある。

(49) Il a lu le journal tous les jours. (Kleiber 1987, 212)

(50) Il lut le journal tous les jours. (*Ibid.*)

(51) Paul a fumé pendant trois ans. (*Ibid.*, 215)

(52) Longtemps, je me suis couché de bonne heure. (M. Proust, *À la recherche du temps perdu*, cité par Kleiber 1987, 216 ; 住井 1994, 124)

Kleiber (1987) は、現在形、半過去形は実現する反復を *habituel*、複合過去、単純過去が表す反復（繰り返し）を *fréquentatif* とし、区別する。

*Fréquentatif – contingent, factuel.* (*Ibid.*, 212)

*Habituel – non-contingent, vrai à tout moment de l'intervalle.* (*Ibid.*, 213)

*Fréquentatif* は事実の裏付けが先立って初めて実現する反復（繰り返し）であり、事態が繰り返されることが明示的か暗示的に示されなければその価値は得られない。確かに、(49)-(50) は *tous les jours* を失えば、1回の事実を表すことになる。(51)-(52) も複数回の事態を想起させる期間が示されなければ、反復の解釈は実現しない。

複合過去形、単純過去形が事実性に基づいた反復を表す点では、日本語のテイル形が担うアクチュアル性の高い反復に対応すると考えられる。

また、単純未来形でも反復（繰り返し）は表される<sup>14</sup>。

(53) Il est inconsistant : un jour il vous fera le meilleur accueil, le lendemain il vous tournera le dos.

(Imbs 1960, 49)

<sup>13</sup> « L'imparfait et le présent sont les responsables directes du double aspect (non contingence et vérité à tout moment de l'intervalle) des habituelles. » (Kleiber 1987, 213)

<sup>14</sup> (53) に挙げる単純未来形を使った反復（繰り返し）は、*Il est inconsistant* となっていることから理解されるように、テンスとしては現在を指しているのではないと考えられる。未来における反復性の議論は、未来におけるパーフェクト相同様、本稿の範囲では扱わない。

Imbs (1960) はこの例の単純未来形と、換入可能な現在形の場合とを比べて、単純未来形の場合は、事態を仮想的な事実 *un fait éventuel* として提示するとする。顕在性から離れて潜在性に移行することで反復（繰り返し）を表しているということである。

これらは次のように整理できる。

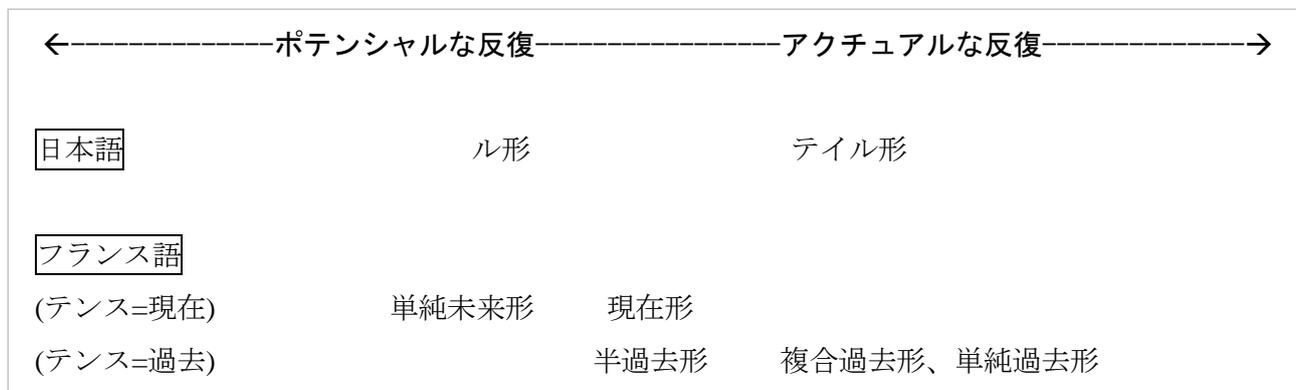


図2 反復相をめぐる日本語とフランス語の形式とその分布

### 3.1.4. 単なる状態

テイル形が単なる状態を表す場合とは、1) 動詞が内的に持つ時間的展開性を持たないか不問に付し、2) テイル形の使用が義務的になる場合を指す。テイル形がアスペクト的価値を持たなくなった場合である。2章で述べたように、完成相－継続相の日本語の基本的アスペクト対立を持たない動詞を工藤 (1995) は静態動詞と呼んで一括している。次の表に整理しよう。

表5 静態動詞の分類 (工藤 1995, 77-78)

	テイル形でのみ成立	テイル形、非テイル形共に成立 (アスペクト的対立なし)	テイル形が成立しない
1) 存在動詞		存在する、点在する	ある、いる
2) 空間配置動詞	聳えている、ひしめきあっている、面している、隣接している		
3) 関係動詞	似ている	意味する、依存する、異なる、示す、違う、適する	値する、あたる、あてはまる、相当する
4) 特性動詞	ありふれている、優れている、しっかりしている、精通している、ばかげている、勝っている	似合う	甘すぎる、多すぎる <sup>15</sup>

<sup>15</sup> 工藤はここに、「泳げる」「話せる」という動詞可能形を含める。

フランス語にも静態動詞 *verbes statiques* と分類されるものがあるが、日本語の静態動詞とは必ずしも一致していない。

*avoir, savoir, connaître, ignorer, croire, aimer, détester* (Wilmet 2003, 312)<sup>16</sup>

また、テイル形の単なる状態用法には、表に挙げられた動詞以外に、次のような例も含まれる。

(54) この道は曲がっている。(=18)

この「曲がっている」は動作継続でもなく、変化結果の継続でもない。道がまっすぐではないことを表している。主体が例えば「くぎ」であれば、変化結果継続（状態パーフェクト）と理解される。つまり「道」という曲がりえない主体であることが単なる状態を実現させていると考えられる。

このメカニズムは、フランス語にも英語にも見られる。

(55) *Le chemin montait brusquement.* (Desclés 2005, 99)

(56) *An ugly scar runs from his elbow to his wrist.* (Langacker 2008, 529)

Desclés も Langacker も基本的に同じ説明をする。Langacker (2008, 528) はこのメカニズムを *fictive motion* と呼ぶ。以下に例文 (56) に対する Langacker の説明を見よう。

Through processing time, C(=conceptualizer ; 筆者加筆) scans along the path by successively invoking the constitutive locations. Here, though, the analogue of the mover is a spatially extended object (like a scar) that occupies all these locations simultaneously. Instead of tracking an object's movement, C scans along the path by way of building up to a full conception of the object's spatial configuration. And at least for this purpose, conceived time has no significant role in the expression's objective content.

(*Ibid.*, 529)

このメカニズムを利用・応用して単なる状態を実現する例はフランス語にも多い。

(57) *L'arbre dépasse/dépassait le mur.*

cf. *Une femme qui a dépassé la cinquantaine et qui ne reçoit que des jeunes gens!* (E. ZOLA, *Pot-Bouille* dans TLF)

<sup>16</sup> Wilmet (2003) はここに *les copules* « être », « sembler », « paraître » を含める。

(58) Cette couture dessinait une croix. (V. HUGO, *Les misérables*)

cf. Il dessinait un mouton.

(55)-(58) の例では主体の無意志性が *fictive motion* の解釈を誘引しているようだったが、次のように主体が意志的な解釈を許容するものでも、このメカニズムは作用しうる。

(59) Tu dépasse ta mère de la tête.

cf. Une femme qui a dépassé la cinquantaine et qui ne reçoit que des jeunes gens! Une ancienne pas grand'chose (E. ZOLA, *Pot-Bouille* dans TLF) (=57)

(60) Il porte un chapeau.

cf. Sauf force majeure je te porterai le 15 février les 5 000 F que je te dois (Lamartine, *Correspondance*, dans TLF)

(61) J'ai une idée.

cf. J'ai bien eu votre message.

なお、この場合、時制は *aspect sécant* でなければ単なる状態は実現できない。これは形容詞と並行的に考えることができる。

(62) a. Il est gentil / Il était gentil.

b. Il a été gentil / Il avait été gentil / Il fut gentil.

#### 4. 結論と今後の課題

本稿は日本語の動詞・テイル形が文のレベルで持つ価値がフランス語ではどのように表されるかを見てきた。結果は、次の表のようにまとめることができる。

表 6 日本語のテイル形が文レベルで持つ価値とフランス語の対応

日本語	フランス語	
	比較可能な価値	価値を実現する形式
継続性	Aspect sécant	現在形、半過去形 (être en train de (+inf))
動作パーフェクト	Aspect sécant extensif	複合過去形、大過去形
状態パーフェクト	Aspect sécant extensif ; résultatif	複合過去形、大過去形 ; être PP
反復性	Aspect sécant	現在形、半過去形

これから調べたいことを以下に列挙する。

(A) テイル形が “未来テンス” で使用されるとき、フランス語はどのように対応するのか。

(B) テイル形のテキストにおける機能はフランス語でどのように実現するか。

1) テイル形の継続相はテキストにおいて設定時点との同時性を表すが、同時に述べることでテイル形は何を実現しているのか。テイル形・継続相のテキストにおける非時間的役割とは何か。例えば次の例において、

(63) a. 家に帰った。晩ごはんを食べた。

b. 家に帰った。友達が来ていた。(一緒に) 晩ごはんを食べた。

「友達が来ていた」という同時的事態が描写されることで、次に継起する事態に「一緒に晩ごはんを食べた」という解釈が生まれる。同時的事態の描写は継起的事態の内容を限定する働きを担っている。

2) 次のような例において、

(64) a. 門をくぐると正面には巨大なけやきの木がそびえ立っている。(村上春樹『ノルウェイの森』)

b. Après avoir passé le portail, on se retrouvait devant un immense keyaki qui se dressait tout droit.

(65) a. 今朝、家を出るときドアを開けたら、ドアの前に虫が死んでいた。

b. Ce matin, quand j'ai ouvert la porte de la maison pour sortir, il y avait une petite bête qui était morte devant la porte.

フランス語には、日本語には表されていない存在を表す語句 *on se retrouvait, il y avait* が挿入されている。(65) に関しては (65a) に対応するフランス語の文として次の例も考えられる。

(65) b'. Ce matin, quand j'ai ouvert la porte de la maison pour sortir, une petite bête était morte devant la porte.

しかし、インフォーマントによれば、*il y a* がない (65b') はあまり言われず、やや文学的だということである。このことから “テイル形はそれ自身で存在と様相の描写を同時に行うことができるのに対し、フランス語の様相の描写は存在が前もって導入されていなければ行えない” という仮説が立てられないか。ここに、文体的な問題も絡んでくるかもしれない。いずれにしても、このような特徴はテイル形を文レベルで観察しているだけではわからないことであり、

テキストレベルでの観察の必要性を示唆している。

## 参考文献

- 青木三郎 (1987): 「現代仏語のアスペクト・テンス・モダリティ—être en train de+infinitif と現在形について—」『フランス語学研究』21, pp.20-35.
- 井上優 (2001): 「現代日本語の「タ」—主文末の「・・・タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』ひつじ書房, pp.97-163.
- 金田一春彦 (1950): 「国語動詞の一分類」『言語研究』15. (金田一春彦編 (1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, pp.5-26 に再録)
- 工藤真由美 (1995): 『アスペクト・テンス体系とテキスト : 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
- 住井清高 (1994): 「LONGTEMPS JE ME SUIS COUCHE DE BONNE HEURE 習慣を表す半過去と複合過去について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』9, pp.124-138.
- 津田香織 (2014): 「フランス語の動詞による状態描写について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』29, pp.107-117.
- 寺村秀夫 (1984): 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.
- 中村芳久 (2009): 「認知モードの射程」坪本篤朗ほか編『「内」と「外」の言語学』開拓社, pp.353-393.
- 益岡隆志 (1987): 『命題の文法』くろしお出版.
- 益岡隆志 (1992): 『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版.
- 吉川武時 (1976): 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」, 金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, pp.155-327.
- Creissels, D. (2000): « L'emploi résultatif de 'être + participe passé' en français ». *Cahiers Chronos*, 6, pp.133-142.
- Desclés, J-P. et Guentcheva, Z. (2005): « Doit-on tenir compte de la polysémie verbale en typologie ? Un exemple contrastif entre français et bulgare ». *Langue française*, 145, pp.93-107.
- Gaotone, D. (1998): *Le passif en français*, Duculot, Paris.
- Imbs, P. (1960): *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, C. Klincksieck, Paris.
- Kleiber, G. (1987): *Du côté de la référence verbale : les phrases habituelles*, Peter. Lang, Berne.
- Lagae, V. (2005): « Les formes en « être + participe passé » à valeur résultative dans le système verbal français ». *Cahiers Chronos*, 12, pp.125-142.
- Le Goffic, P. (1993): *Grammaire de la phrase française*, Hachette supérieur, Paris.
- Langacker, R. W. (2008): *Cognitive grammar: a basic introduction*, Oxford University Press, Oxford.
- Riegel, M. (1985): *L'adjectif attribut*, Presses universitaires de France.
- Vikner, C. (1985): « L'aspect comme modificateur du mode d'action : à propos de la construction être + participe passé ». *Langue française*, 67, pp.95-113.
- Wilmet, M. (2003): *Grammaire critique du français* (2<sup>e</sup> édition), Hachette supérieur, Paris.

(つだ かおり / 文芸言語専攻5年)